

新古今和歌集古注釈の評語一覧

—『新古今集聞書』と中世古注—

近藤 美奈子

はじめに

東常縁原撰『新古今集聞書』は、新古今和歌集のまとまった注釈書の嚆矢で、収載歌注は二〇〇首である。筆者は前稿「常縁原撰『新古今集聞書』の評語について—秀歌観と教導的性格—」¹⁾において、常縁原撰本の注釈中に用いられている批評に関する語（以下、「評語」と総称する）の特徴を捉えるために、ほぼ同時代の新古今和歌集古注釈書である『新古今拔書抄』²⁾との比較を行い、そして、原撰本の評語から見えてきた常縁の秀歌観と言説の教導的性格について考察した。前稿では紙幅の都合で、原撰本との比較対象として『新古今拔書抄』以外は取り上げることができなかったが、本稿ではその他の中世古注にまで対象を広げて評語を調査し、褒詞を中心に評語一覧を作成して前稿の補足とするものである。この一覧によって、前稿で『新古今拔書抄』と比較して述べたように、原撰本が他の古注に較べて評語の種類と数量の多いことが看取できるであろう。調査対象は『新古今集古注集成 中世古注

編 1』³⁾に収載されている注釈書とする。

《凡例》

一、調査対象とする注釈書名（以下、「**一**」で示した略称を用いる）と翻刻編者名、収載歌注数を次に記す。片山享編『新古今拔書（梁瀬一雄氏蔵本）』【**拔書**】三〇首、片山享編『新古今拔書抄（松平文庫本）』【**拔書抄**】一一六首、武井和人編『柿本備材抄（松平文庫本）』【**備材**】一二首、黒川昌享編『新古今注（京都大学図書館本）』【**新古今注**】七四七首、黒川昌享編『十代拔書（神宮文庫本）』【**十代**】九六首、大取一馬編『詞字注（龍谷大学図書館本）』【**詞字注**】六二首、岸田依子編『宗長秘歌抄（川越市立図書館本）』【**秘歌抄**】八八首、池尾和也編『九代抄（内閣文庫本）』【**九代抄**】五二九首、兼築信行編『九代集抄（甲南女子大学図書館本）』【**九代集抄**】五三二首、余語敏男編『宗碩五百箇条（聞書連歌（西尾市立図書館岩瀬文庫本）』【**聞書連歌**】八首、片山享編『天文鈔本新古今倭詞集春夏（今治市立河野記念美術館本）』【**天文鈔本**】二八六首。原撰本は【**原撰**】と略す。

各注釈書の詳細については本書の「解題」（翻刻編著者による）を参照されたい。それによって少し説明を加えると、【抜書】は心敬注の聞書、【抜書抄】は心敬所与の心敬注が兼載によって書き換えられたものである。また、【九代抄】と【九代集抄】は、牡丹花肖柏が後撰和歌集から続後撰和歌集に至る九勅撰和歌集の秀歌を撰歌して成った『九代抄』に注釈を付けた有注本であるが、両者は系統が異なる注釈書である（本書には新古今注部分のみ抄出）。

二、評語の用例については注釈書名と『新編国歌大観』の歌番号を記す。同番号が重複記載されている場合は複数の用例があることを示す。また、例えば、【原撰】1757（Ⅱ1808）の如き表記は、一七五七番歌注に混入している一八〇八番歌注部分に用例があることを示す。なお、括弧に入れたものは、評語そのものではなく修飾語としての用例であるが、各注釈書における言葉の好尚が表れていると思われるので参考までに示した。

《用例》

あさく 【秘歌抄】 116

あたらし 【原撰】 459
635

新しき詞 【九代抄】 133

あはれ 【原撰】 1074
1191
1329 【抜書】 697
1666
1718
1719 【抜書抄】

63 697
1315
1562
1666
1718
1719
1782

あはれなる歌 【原撰】 478
1281
1361 【九代集抄】 1624

あはれふかき歌 【原撰】 116
856
1449

あはれ深し 【九代抄】 58 【天文鈔本】 143

ありのまま 【原撰】 170
378
643
1204
1623
1689 【抜書抄】 232
【九代

集抄】 641
965
966

一体 【抜書抄】 530

有心 【原撰】 52
441
1155
1276
1456
1517

有心体 【原撰】 625
1455
1757
1808 【抜書抄】 1666

うつくし 【抜書抄】 30

艶【原撰】 681
1435

大いなる歌【九代集抄】 991

落ち着かぬ歌【原撰】 1228

鬼とりひしぐ体【原撰】 1564

面白し【原撰】 1 169 362 395 459 661 1326 1490
【拔書抄】 491 【秘歌

抄】(255) 689 【秘歌抄】 1131 1210 【九代抄】 40 52 58 225 333 【九

代集抄】 18 154 220 225 (333) (411) 427 (449) 513 (539) 641 (644) (647) 650

(655) (932) 966 1271 1312 1676

面白き歌【秘歌抄】 698 【九代集抄】 487 607 677 903 953 1136 1466 1659

1675

(姿) 面白き歌【秘歌抄】 1128

(つゞきの) 面白き歌【天文鈔本】 75 157

(名譽) 面白き歌【九代集抄】 951 1521 1525 1547

(余情) 面白き歌【秘歌抄】 512

面白き心【九代抄】 616

面白き詞【天文鈔本】 245

面白き詞づかひ【秘歌抄】 1618

面白き仕立て【九代集抄】 1599

面白き体【聞書連歌】 1030

面白く仕立てたる歌【九代集抄】 953

面白さかぎりなし【九代抄】 427

思ひやりたる心【九代抄】 395

かなしき歌【原撰】 1309

631 感情【原撰】 58 170 478 942 1353 【拔書抄】 201 247 300 441 【九代抄】

	感情深し【天文鈔本】	209			
	眼前の体【原撰】	27			
	感ふかし【拔書抄】	935			
	聞き立つ【九代集抄】	631			
	(此詞) きよよからず【詞字注】	924			
	奇特【原撰】	3			
	743	27			
	783	38			
	803	52			
	939	76			
	949	126			
	1028	252			
	1142	270			
	1204	300			
	1333	378			
	1317	455			
	1517	459			
	1561	480			
	1623	499			
	1728	512			
	1757	534			
	(II 1808)	554			
	【拔書】	635			
	126				
	1718				
	(1719)				
	【拔書抄】				
	262				
	719				
	933				
	1317				
	1601				
	1719				
	【秘歌抄】				
	76				
	478				
	【九代集				
	抄】(45)				
	(572)				
	(1750)				
	【天文鈔本】				
	87				
	(90)				
	きゃしゃなる歌【九代集抄】	1016			
	興【九代抄】	234			
	350				
	352				
	386				
	401				
	403				
	418				
	541				
	606				
	607				
	620				
	641				
	644				
	647				
	650				
	655				
	662				
	【九				
	代集抄】	98			
	513				
	541				
	618				
	650				
	心のふかき歌【原撰】	1053			
	心得大切【秘歌抄】	1030			
	心得がたし【秘歌抄】	116			
	480				
	言語不可説【原撰】	675			
	言語に不及【九代抄】	33			
	82				
	202				
	景気【拔書】	513			
	金言妙句【原撰】	1601			
	興じたる心【九代抄】	334			
	(言語道断の)興【九代抄】	234			
	(面白き)興【九代抄】	386			
	1519				

	心深し【拔書抄】	1	1562	【九代抄】	27	【天文鈔本】	1	懇切なる歌【原撰】	1282
	心やさし【原撰】	1226						しかくたる歌【九代抄】	112
	詞づかひゆうく【原撰】	99						子細ある歌【原撰】	218
	ことはりの付がたき歌【原撰】	434						重のある歌【原撰】	1317 1322 1565
	理をきはめたる歌【九代集抄】	1843						殊勝【拔書】	126
	言語道断【原撰】	62	169	201	356	359	484	上手【原撰】	3
	【秘歌抄】	(56)	130	(255)	(292)			正風【九代集抄】	641
	【九代抄】	40	(234)	418	437	(600)	641	675	【九代集抄】
	33	44	(46)	56	82	94	(114)	122	225
	333	(333)	(411)	427	(449)	487	513	(539)	(590)
	591	(593)	(600)	607	(618)	(643)	(644)	(647)	(655)
	661	(661)	675	677	695	903	(932)		
	934	(945)	951	953	965	(969)	(969)	1136	1271
	1519	(1521)	1521	(1523)	1526	1526	(1544)		
	1563	1624	1659	1675	1676	1938			
言語道断不可思議【原撰】	1322								
	すがた不可説【拔書抄】	251							
	すがた美し【原撰】	1764							
	すがた詞いふばかりなき歌【原撰】	1542							

- すがた無類歌【秘歌抄】 56
- するくと(きこえておもしろし)【原撰】 1326
- 不及是非【九代集抄】 591
- 切【原撰】 513 954(1053) 1281 1316(1329)(1361) 1394【拔書抄】 1081
- 切なる哥【原撰】 1304
- 切なる詞【原撰】 214 517 1302
- 不及舌頭【九代集抄】 449 1526
- 絶妙【原撰】 154
- 絶妙不思議【原撰】 174
- 大事【秘歌抄】 480 1316
- 大事の歌【原撰】 577 1330【秘歌抄】 56 129【天文鈔本】 190
- たぐひなし【九代集抄】 44
- 長高し【原撰】 478 703 788 1313【拔書抄】 1【天文鈔本】 1
- 長高き歌【天文鈔本】 226
- 当意即妙の心【九代抄】 491
- 何(心)もなくよみたる歌【拔書抄】 262
- 涙おさへがたき歌【原撰】 363
- 冷えちぎる【九代集抄】 615
- 筆舌に述べがたし【拔書】 154【拔書抄】 1 154
- 不及筆頭【九代集抄】 30
- 風(諷)詞【拔書抄】 561
- 風流【原撰】 981 1278【天文鈔本】 112
- 深き歌【拔書抄】 1316
- ふかき心いひはてぬ歌【原撰】 362

ふかく思廻したる歌【原撰】	530	無極の道心者の歌【原撰】	1470
不可思義【原撰】	1186 1322 1601	無上の歌【原撰】	1206
風情【原撰】	3 36 52 114 359 441 459 614 1155 1276 1313 1561	名歌【九代集抄】	234
	【十代】	【天文鈔本】	76 263
粉骨【原撰】	451 455 459 1304	名誉の歌【天文鈔本】	254
凡慮及ぶべきにあらず【拔書抄】	719	めづらし【九代抄】	1595
	99	【天文鈔本】	88
凡慮の不及所【原撰】	62	めづらしき詞【秘歌抄】	1224
凡慮の及べき所ならず【原撰】	803	めでたき歌【九代集抄】	719
真の歌【九代集抄】	996	やさしき歌【原撰】	214
見立つ【九代集抄】	643	やすくと【原撰】	342
みるやうに読る歌【原撰】	455	【拔書】	126
		【拔書抄】	126
見る様の体【天文鈔本】	18	幽【原撰】	52
		【原撰】	342
妙【天文鈔本】	4 52 135	幽【原撰】	513
		【原撰】	681
		【九代集抄】	939
		【天文鈔本】	1329
		【天文鈔本】	1353
		【天文鈔本】	1437
		【天文鈔本】	1449
		【天文鈔本】	1561
		幽玄【原撰】	441
		【原撰】	614
		【九代集抄】	1198
		【天文鈔本】	1266
		【天文鈔本】	1517
		幽玄体【原撰】	1536
		【原撰】	214
		【九代集抄】	214

優美【拔書抄】 1336 【天文鈔本】 1

(深淵) 優美【天文鈔本】 83

良きたとへ【原撰】 1101

余情【原撰】 38 170 433 607 856 1191 1456 【拔書】 362 513 【拔書抄】

87 362 513 【十代】 83 【秘歌抄】 512

理詰め之歌【原撰】 1294

利根なる歌【原撰】 530

まとめ

この評語一覧から確認したことを少々述べたい。

【新古今注】は調査対象の注釈書中で収載歌注が七四七首と最も多いにもかかわらず、評語の用例数は少ない。これは「解題」に「注の内容は、概して言えば、語句の辞書的注釈、本歌、和漢の典拠、年中行事の指摘説明など」「歌意・一首の主意などの「解釈」的なものへの踏込みはあまり見られない」と述べられている【新古今注】注釈の性格の表れだと考えられる。

【原撰】は収載歌注二〇〇首の割には他の注釈書に比して評語の種類と用例数が多いことが改めて確認できよう。そこで【原撰】を中心に各注釈書の特徴的な評語について見ていきたい。

【原撰】には、「あはれ」「有心(体)」「艶」「面白し」「感情」「眼前の体」「長高し」「風情」「やさしき歌」「幽」「幽玄(体)」「余情」等の歌評語や美的理念を表す語、「奇特」「切」「絶妙」「言語道断」「不可思議」「粉骨」等の仏語・漢語系の褒詞が目立つ。また、「ありのまま」「上手」「するく」と「やすく」と「のよくな語は常縁の秀歌観を表していると考えられるので注目される。

【原撰】以外に用例が見られないという点で注目すべき語は「有心」「艶」「眼前の体」「重のある歌」「上手」「するく」と「絶妙」「不可思議」「幽」等である。

次に、【原撰】には複数の用例があり、且つ他の特定の注釈書にだけ用例が認められるという点に特徴がある評語を挙げてみよう。

「あはれ」類は【原撰】九例、【拔書】三例、【拔書抄】七例、【九代抄】【九代集抄】【天文鈔本】に各一例ある以外は他の注釈書には見られない。「ありのまま」は【原撰】六例、【拔書抄】一例、【九代集抄】三例。「有心体」は【原撰】三例、【拔書抄】に一例。「感

情」類は【原撰】五例、【拔書抄】四例、【九代抄】【天文鈔本】各一例。「奇特」は【原撰】三四例と極めて多いが、他には【拔書】二例、【拔書抄】六例、【秘歌抄】二例、【天文鈔本】一例のみ。「切」類は【原撰】九例、【拔書抄】一例。「大事の歌」は【原撰】【秘歌抄】各二例、【天文鈔本】一例。「長高し」類は【原撰】四例、【拔書抄】一例、【天文鈔本】二例。「風情」は【原撰】一二例以外には【十代】一例のみ。「風流」は【原撰】二例、【天文鈔本】一例。「粉骨」は【原撰】四例、【拔書抄】一例。「幽玄(体)」は【原撰】六例、【九代集抄】一例、【天文鈔本】二例。「余情」は【原撰】七例、【拔書】二例、【拔書抄】三例、【十代】【秘歌抄】各一例である。

「面白し」は【原撰】に八例あるが、「面白き歌」の類を含めると【九代抄】には九例、【九代集抄】には二七例ある。修飾語的用例も含めると更に多くの用例数のある【九代集抄】では「面白し」が歌の重要な評価基準の一つになっているものと思われる。

また、仏語に由来する褒詞「言語道断」は【原撰】七例、【秘歌抄】一例、【九代抄】五例、【九代集抄】三二例で、【九代集抄】の用例が圧倒的に多い。【九代集抄】には修飾語としての用例も二四例あり、注釈者のこの語への好尚が知られる。

さて、【原撰】には用例がないけれども、着目すべき評語として「興」と「正風」を挙げたい。

「興」類は【九代抄】一九例、【九代集抄】五例の用例があるのみで、他の注釈書には見られない。特に【九代抄】にはこの語が多用されており、「興」の観点から歌を評価するという注釈姿勢が表れていると考えられ、注目される。

「正風」は【九代集抄】【天文鈔本】各二例のみで用例数は多くはないが、それぞれの注釈書の秀歌観に関わる留意すべき語だと思われる。

ところで、「解題」によって既述したように【九代抄】【九代集抄】は別系統の注釈書である。前述のように「面白し」「言語道断」「興」「正風」に関する両者の用例数に顕著な相違が見られるのもその事実を裏付けるものである。

以上、前稿の補足として評語一覧を作成し、【原撰】を中心に評語の種類と用例数から見えてきた特徴について少々述べてみた。評語一覧によって、それぞれの注釈書における注目すべき評語が判明したが、その考察は今後の課題としたい。

- 1 『古典文藝論叢』第八号 大取一馬教授退職記念号、二〇一六年二月。
- 2 以下、東常縁原撰『新古今集聞書』を「原撰本」と略称する。「原撰本」の伝本は、細川幽齋による加筆・修訂の痕跡が少なくと認められる、細川文庫本（九州大学附属図書館蔵）による。
- 3 片山享編『新古今拔書抄（松平文庫本）』（『新古今集古注集成 中世古注編1』、笠間書院、一九九七年）による。
- 4 注（3）参照。
- 5 注（1）に同じ。
- 6 拙論「常縁原撰『新古今集聞書』の注釈についての覚書」（『甲南国文』第六二号、二〇一五年三月）において、「奇特」を注釈方法と教導的性格の面から考察した。
- 7 【九代集抄】の「解題」で指摘されている。